

随感 『北京官話伊蘇普噺言』の訳者中田敬義に関する覚書

吉見 孝夫

一 中田敬義

明治期においてイソップ寓話の普及に最も功のあったのは、渡部温の『通俗伊蘇普物語』である。それを北京官話に翻訳した『北京官話伊蘇普噺言』が渡部の手で明治一二年（一八七九）に出版されている。訳者は中田敬義という人物である。中田は外交官としてまた中国語教育の先駆者として業績を残しており、無名とはいえないが、今日一般には知られていない。この稿は、中田に関するあれやこれを心覚えとして書きとどめたものである。取り立てて新しい史的事実はないが、ただ余り注意されていないことに焦点を当てたとは言えるであろう。

あらかじめ予備知識として、中田の簡単な経歴、『北京官話伊蘇普噺言』の成立の経緯を示しておく^{注一}。

中田敬義は安政五年（一八五八）金沢に生まれる。明治九年（一八七六）に東京外国語学校生徒であった時に、外務省から三等書記官見習として在清国北京公使館に派遣され、以後外交官の道を歩む。一四年（一八八一）まで在清国北京公使館、一七年（一八八四）から二三年（一八九〇）まで在英國ロンドン公使館に勤務した後に、本

省で報告課長、秘書課長などを経て二八年政務局長に就き、三一年（一八九八）一〇月に退職する。榎本武揚、陸奥宗光の二人の外務大臣には大臣秘書官を兼務して仕えている。特に陸奥の信任が篤く、陸奥が『蹇蹇録』を著述するのには大きく貢献している。二八年（一八九五）の日清戦争の下関の講和会議に出席しているのは、中国語に堪能であったこともあるが、当時秘書課長の職にあり、その任務は単なる通訳としての役割に留まるものではなかった。大隈重信が外務大臣に就任すると、四一歳でやむなく外務省を辞するのは、大隈が中田を陸奥派と見て避けた故であろう。またこの頃になると官僚養成システムとしての帝国大学の出身者が相応の地位に就くようになり、中田のような古いタイプは居場所を失ったのかと思われる。以後は陸奥の次男古河潤吉が社長をしていた古河合名会社の重役を務め、また日本美術協会の副会頭に就いている。美術界に関わったのは、書に巧みであったからという^{注二}。昭和一八年（一九四三）、八六歳の天寿を全うした。

明治九年清国赴任に際し、当時東京外国語学校校長であった渡部温から『通俗伊蘇普物語』を北京官話に翻訳

することを依頼された。同じ頃、長沢正毅がフェネロン (Fénelon) の著作を日本語に翻訳して出版する目論見があったようだが、これも渡部が同校生徒であった長沢に翻訳を勧めたらしい^{注三}。中田の場合は日本語を外国語に、長沢は外国語を日本語にという違いはあるが、渡部としては、いずれも外国語教育の教科書とする意図があったようだ。長沢の翻訳は結局出版されなかったと推定されるが、中田のは出版され、事実教科書として使用された。

二 中田敬義の名

中田の名「敬義」は、これに読み仮名を付す場合は、一つの例外を除いて諸書「たかのり」としている。例外は六角恒廣『漢語師家伝―中国語教育の先人たち』中の「三 中田敬義―イソップ物語を北京官話に」である。

これには「中田敬義^{なかたよしのり}」とルビが付いている。中田について最も詳しい評伝と言えるのが、多くの文献を博搜しているこの六角の著書である。それだけに唯一の例外とはいえ、無視することはできない。「敬」字を一般的ではない「よし」と読んでいるからには何か根拠があったものと思われる。ただ、残念ながら「よしのり」と読む根拠が挙げられていない。

筆者が調査した範囲では「よしのり」の根拠を見出すことはできなかった。一方、「たかのり」が正しいのだろうと推測される資料を二つ見つけることができた。以下のものである。

① 中田敬義「日清戦争ノ前後」^{注四}

これは中田が自分の関わった外交交渉の裏側を述べたものである。その略歴紹介文に「中田敬義 (Takamori Nakada) 氏」とある。外務官僚であった中田ならば、文書に氏名をローマ字で記す機会が多々あったであろう。その外務省資料に「Takamori」とあるのは、中田の名の読みを確定する根拠となる。因みに「中田」ではなく「なかだ」と認めるべきこととなる。

④ 山岸共「金沢出身外務官僚中田敬義」^{注五}

中田の長男中田勝彦の次女平林富子の言として、中田が「敬義をタカノリと読むのは一般には困難だから、読みやすい名にすればよかったと述懐していた。」とある。中田の直話を孫が証言しているのであるから、これも証拠力は高い。

三 中田と宍戸璣

中田は明治九年 (一八七六) 三月から一四年 (一八八一年) 三月まで北京公使館に勤務した。その駐在中の一二年 (一八七九) 三月から一四年 (一八八一年) 一月まで駐清国公使であったのが宍戸璣^{ししど たまき}である。宍戸は実はイソップ寓話と関わりをもつ人物である。この二人が二年ほど身近に接していたのは、歴史の偶然と言ってしまうと大袈裟だが、興味深い。宍戸とイソップとの繋がりを言う前に、彼の略歴を紹介しておこう。

宍戸璣は文政一二年 (一八二九)、長州藩士の家に生

まれ、後に吉田松陰が引き継ぐ玉本文之進の松下村塾に学ぶ。同塾では一つ歳下の松陰と机を並べている。その後、尊皇攘夷運動に奔走する。維新後は、山口藩権大参事、刑部少輔、司法大輔、文部大輔などを歴任した後、清国公使となる。明治二三年（一八九〇）の帝国議会発足時には貴族院議員に任命されている。子爵。三四年（一九〇一）歿。木戸孝允、山県有朋、伊藤博文に代表される、長州勤王志士から明治政府要人へ昇り詰めるという典型を体现した一人である。山県、伊藤には一〇歳ほどの、木戸には四歳の年長に当たる。

清の道光二〇年（一八四〇）にイギリス人ロバート・トーム (Robert Thom) が英語のイソップ寓話集を中国語に翻訳し『意拾喻言』と題して広東で出版した。その一部が香港で発行されていた中国語雑誌『遐邇貫珍』に再録され、また『伊娑菩喻言』の書名で一八五三年以降に上海、香港で刊行されている。『意拾喻言』は日本には伝わらなかったが、『遐邇貫珍』『伊娑菩喻言』は日本にもたらされた。それを吉田松陰が閲読し、跋文を遺していることが知られている。次のものがそれである。

跋伊娑菩喻言

世修欧学者、僉曰、西洋人仁牟、未曾有禍心也、若使觀此書、豈不茫然自失乎、吾曾獲其馬鹿同遊一則于遐邇貫珍中、書長崎近聞之後、世衡頃見示其全七十三則、把而閱之、其斧頭求柄、不甚其似假下田箱館之事乎、獺戸逐兎、不甚類借手米利、以拒諸仏之策乎、鵓狐狼犬、自謀騙人、不一而足、因使岡部

生写藏焉、欲問執西洋人仁牟云尔者之口也、安政四年十一月二十日、二十一回生跋、注六
新村出の書き下し文も載せておこう。

伊娑菩喻言に跋す

世の欧学を修むる者、僉みな曰く、「西洋人は仁なり、未だ曾て禍心あらざるなり」と。若し此の書を觀せしめば、豈に茫然自失せざらんや。吾れ曾て其の馬鹿同遊一則を遐邇貫珍の中に獲て、「長崎近聞」の後に書せり。世衡頃其の全七十三則を示さる。把りて之を閱するに、其の斧頭柄を求むるは、甚だしく下田箱館を仮すの事に似ずや。獺戸兎を逐ふは、甚だしく不其類借手を米利に借りて以て諸仏を拒ぐの策に類せずや。鵓狐狼犬、自ら謀人を騙かんと謀るや、一にして足らず。因つて岡部生をして写藏せしむ、西洋人は仁なりと尔云ふ者の口を問執せんと欲すればなり。安政四年十一月二十日、二十一回生跋す。注七

日本の将来を憂える松陰には、西洋人は仁ある者だと思ふ、世間の危機意識の無さに警鐘を鳴らしておきたかった。『伊娑菩喻言』を見よ、そこにはカラスやキツネ、オオカミ、イヌが他人をだます話に満ちていてはないか、ここにこそ彼ら西洋人の思考法が顕現している、と。原文にはいささかの注解が必要だろう。「馬鹿同遊」とは次のような話。馬が常に鹿にだまされていた。報復しようと武人に助けを求めて、承諾を得た。ところが、武人は報復を手助けするどころか、馬に鞍を付け、轡を

はめてこき使うのであった。馬はおのれの浅慮を後悔するばかりであった。

柄のない斧があった。ある木に柄になる枝を所望したところ、木は一枝ぐらいはと承知した。ところが柄を得た斧は悉く木々を切り倒した。これが「斧頭求柄」の話である。時あたかも安政元年（一八五四）の日米和親条約で下田、箱館が開港された時代である。ここが突破口となつて日本が侵略される悪夢を松陰は見ていたのである。

「獵戸逐兎」も「馬鹿同遊」同様、他に助けを求めかえつて己を害する羽目に陥る話である。花園を兎に踏み荒らされる者がいた。そこでその者は獵師に兎を追い払うことを依頼した。獵師は犬を使つて兎を退治したが、花園は見る影もなく踏み尽くされてしまった。「米利」はアメリカ、「諸仏」はイギリス・フランスを指す。「諸」はポルトガル語の発音に基づく「諸厄利亞」の略記。アメリカを使つて英仏を牽制したつもりが、アメリカにしてやられる危険を松陰は指摘したかったのである。

『伊娑菩諭言』を写した「岡部生」は、玉本文之進から松陰が引き継いだ松下村塾の塾生岡部富太郎。「全七十三則」つまり『伊娑菩諭言』を松陰に示した「世衡」が宍戸璣である。以下に記すように宍戸自身、『伊娑菩諭言』の跋文を物している。

諭言七十三條、蓋英人所譯而係上海施醫院活字刷板、其舉地名說時世皆假之支那、是譯者之苦心也、此書未經清舫之售販、而某氏嘗獲之於俄艦中云、亦

罕觀珍籍牟、余借覽數日、乃謄而篋之、宗本間圖人物飛走、今以其不便於謄寫、盡削之

丙辰陽月 敬宇生璣識注八
これもまた新村出の書き下し文があるので、示しておく。

諭言七十三條、蓋し英人の訳する所にして上海施醫院の活字刷板に係る、其の地名を挙げ時世を説くや皆之を支那に仮る、是れ訳者の苦心する所也、此の書未だ清舫の售販を経ず、而某氏の嘗て之を俄艦中に獲たる所と云ふ、亦罕觀の珍籍なり、余借覽數日乃ち謄して之を篋す。宗本間間人物飛走を図す、今謄写に不便なるを以て尽く之を削る

丙辰陽月 敬宇生璣識注九
「敬宇」は宍戸の号。宍戸は某氏から『伊娑菩諭言』を借り、數日かけて書き写したわけである。「丙辰陽月」は、松陰跋文の一年前、安政三年一〇月に当たる。「上海施醫院活字刷板」というのは、『伊娑菩諭言』のいくつかの版のうち、最も古いもので、正確な刊年は不明ながら、一八五三年頃と推定される。「其舉地名說時世皆假之支那」というのは、訳者トームがイソップの世界を中国に変えていることをいう。「俄艦」はロシアの戦艦のこと。ロシアの表記「俄羅斯」の略記。内田慶市は、このロシア戦艦は嘉永六年（一八五三）日本にやつてきたプチャーチン率いる四隻の中のバラルダ号で、それに同乗していたゴンチャロフが上海で手に入れた『伊娑菩諭言』を宍戸周辺の某氏に与えたと推測している注一〇。

筆者は上海施医院版を目睹していないが、「宗本間図人物飛走」とあるので、登場する人物や鳥獣の挿絵があるようだ。同治七年（一八六八）香港英華書院版には挿絵はない。

ようやく中田と宍戸の交わりに筆を進める段階にきた。一方は若い下級外交官、他方は清国における日本の代表者。同じ職場にあつても果たして会話を交わす機会もどれほどあつたのか疑わしくもなるが、中田の、例えば次の証言などを読むと、宍戸は中田を重用していたと推測できる。

それは談判をやる時の着席が宍戸公使の次に通訳上の便宜により私が坐り、其次に書記官田辺太一氏、通訳官石崎次郎太氏と坐り居り、いつも其通りなりしが、一体支那の流儀から云ふと官等順に坐らなければならぬ。ところが通訳をするため私が公使の直き隣に坐つて居る。注二

通訳は他にもいる中で、二三、四歳の中田を常に隣席させる事実が宍戸の信頼を読み取つてよいだろう。中田は明治一年（一八七八）には『通俗伊蘇普物語』の北京官話訳を完成し、翌一二年（一八七九）三月の宍戸着任の一月後にはこれを刊行している。そこで小論の筆者としてはこんな場面を想像したくなる。中田が『北京官話伊蘇普諭言』を宍戸に示して言う。「この度小著を刊行した。ついで閣下の高覧に榮に浴したならば幸甚である」と。すると宍戸が「かつて漢訳の『伊娑普諭言』なるものを写したことがある。それを松陰に見せたところ、

これでこそ西洋人の考えが手に取るようにわかるといたく感じていた」と応ずる。そんなイソップ談義に花を咲かせる一幕があつたのではないだろうか。

四 中田と鷗外

中田は明治一七（一八八四）九月から二三年（一八九〇）九月まで英国ロンドン公使館に勤務した。森鷗外は明治二年（一八八八）七月ドイツ留学を終え、八日から一八日までロンドンに滞在している。この短い間に二人は異郷で出会っている。このことは既に小堀桂一郎『森鷗外——日本はまだ普請中だ——』に記されている。

七月十日、投宿してゐた宿に尾崎行雄がやつてきて同宿し、十八日まで宿を共にすることとなつた。尾崎は二十年十二月に保安條例を適用されて東京を追放といふ處分を受け、學堂の號を改め愕堂としたが、別段狼狽したわけではなく、むしろこれを好機として外遊の途に上り、偶然此の時にロンドンに來合せものである。

その夜英京の河瀬眞孝全權公使が、滯英中の樺山海軍次官、山本海軍軍醫少監、石黒軍醫監等を客として和食の招宴を催してくれた。森もこれに與り、その席で中田敬義と面識し、話を交してゐる。中田は外務官僚としては青木周藏の部下であつたから森とは共通の話題もあつたであらう。字を子肅と云ひ、外國語學校では校長渡部溫の教へ子であつた。『通俗伊蘇普物語』の譯者であつた渡部に命ぜられて、

支那語に熟達してゐた中田は渡部の譯本をそっくりそのまま漢譯し、明治十二年に『北京官話伊蘇普噲言』として、渡部の經營する無盡藏出版から出版した。森は（行于世）^{よにおこなはる}とだけ簡単に記してゐるが外國語學校での支那語教科書としてよく使はれたらしい。^{注二}

後に「憲政の神様」と謳われた尾崎行雄が、後の文豪森林太郎の宿に転がり込んでくるといふのは、山田風太郎あたりがフィクションに仕立てあげそうな面白すぎる事実だが、これは措いておこう。この記述の根拠の一つは、鷗外の、ドイツ留学を終え日本に帰国するまでの日記『還東日乗』である。

十日。尾崎行雄來同居。行雄號學堂。著文論事。被逐到此。乃改學堂作愕堂云。夜河瀬全權公使見饗邦膳。與中田敬義語。敬義字子肅。石川縣人。熟通支那語。嘗著官話伊蘇普噲言。行于世。^{注三}
川口久雄の訓読文があるので示しておこう。

十日、尾崎行雄、來りて同居す。行雄は學堂と号す。文を著はし、事を論ず。逐はれて此に到る。乃ち學堂を改めて愕堂の作る。云はく、夜河瀬全權公使、邦膳を餐せられ、中田敬義と語ると。敬義、字は子肅、石川縣の人、熟々支那語に通ず、嘗て『官話伊蘇普』の噲言を著はし、世に行はる。^{注四}

ここには確かに河瀬公使の招待を受けたことは書かれているが、樺山、山本、石黒といった参列者の名前はな
い。『森鷗外』は、評伝として当然の処置ではあるが、

記述のすべてにわたって根拠となる資料名をいちいち挙げてゐるわけではない。何が典拠となつてゐるのか中田に関心を抱く者としては気になり調べると、どうやら鷗外の上司、石黒忠惠の日記であるらしい。この日記の一部分が竹盛天雄によつて岩波書店『鷗外全集』の月報に翻刻され、幸いそれに明治二十一年七月一〇日が含まれてゐる。

七月十日 晴 火

〔前略〕／七時公使ノ招ニ赴ク／樺山 山本 村上
遠藤 伊月 石黒 荒川 中田 岡部 公使夫妻
藺田夫人 森 / 十時辭シテ歸ル馬車ナリ〔後略〕

^{注一五}

ここには、中田、森は無論のこと、樺山（樺山）、山本、それに石黒自身の名も見えている。それにしてもと思う。中田は地位からするならば、一公使館員という、参列者の中で最も目立たない存在である。鷗外が旧知の軍関係者に言及しないのはさておいて、その日語らった相手は一人だけではないだろうに、敢えて「與中田敬義語」と記し、中田の紹介だけに言葉を費やしているのは、鷗外に関心の赴くところを示唆している。その夜は中田との会話が最も印象に残つたのであろう。中田は漢詩にも通曉しており、自ら作詩もする^{注一六}。そんな中田ならば、鷗外と文学談義を交わすこともできたらうと想像する。後年中田は日本美術協会の副会頭にも就いた。この関係で鷗外と同席する機会もあつたのではないか。その折には、ロンドンの一夜を懐旧する会話も交わされた

ことだろう。

五 中田と渡辺修二郎

陸奥宗光は外務大臣として秘書官中田を深く信任していた。また中田もそれに十分に応えていたことは中田の「故陸奥伯ノ追憶」を読むとよく理解できる^{注二七}。両人の関係を示す恰好の例が、陸奥の外交記録『蹇蹇録』である。中塚明は「陸奥宗光『蹇蹇録』を起草、刊行するにあたっては、秘書官中田敬義（一八五八—一九四三）の並々ならぬ内助を得ていたことは、つとに知られているところである。」という^{注二八}。事実、中田は陸奥自筆の草稿や、外務省が堅く秘本とした仮装本を託されている。

この『蹇蹇録』の刊行に関わった人物に渡辺修二郎がいる。『外務省の百年』に次の記述がある。

明治三十二年三月四日、関善次を編集兼発行人として、左の如き一書が出版された。

「外交始末 蹇蹇録」（菊判淡褐色紙表紙洋仮装本・一九五頁・東陽堂書店・六十銭）

表紙の中央には標記の書名、右に「陸奥宗光著」左に「無号外史批評」とある。（中略）無号外史とは実は当時政治評論家として少しく聞えた渡辺修二郎である。渡辺には陸奥在世中に彼の功罪を辛辣に論評した「評伝 陸奥宗光」なる一書がある（明治三十年一月出版）。「蹇蹇録」の記述に関する批評が手酷いのはさもあるべき所である。（中略）

一方、渡辺修二郎は関の懇懇によつて「蹇蹇録」の英訳を思い立ち、明治三十二年十一月頃よりこれに従事していたが（警視庁内偵書）、三十四年二月、農商務省嘱託の肩書きでヨーロッパに渡航し、いかなる手蔓によつたか、ベルリンの民俗博物館に勤務した。駐独日本公使館では渡辺が「英訳蹇蹇録」をロンドンの某書肆より出版計画中との風評を聞き、井上勝之助公使館に招いて、その事を思い止るよう説得した。（中略）果して「英訳蹇蹇録」が上梓されたか否か、その後の消息を詳かにしない。^{注二九}なお、この東陽堂版はすぐに発売禁止の処分を受ける。ところで、この渡辺もまたイソップ寓話と関わりをもつ。一五九三年に日本で最初に翻訳されたイソップ寓話集『エソポのハブラス』（『天草本伊曾保物語』は江戸期に忘れ去られてしまふが、明治二年（一八六八）に「中外新聞」がイギリスの新聞を再録する形でこれを紹介している。明治末年に、その「中外新聞」の記事を新村出に教示したのが渡辺である。その経緯は新村の『伊曾保物語』の旧代和本」に詳しく示されている。

天草本を日本で最も早く紹介したのは、明治二年七月九日東京出版の「中外新聞」第二十三号第四第五葉に於て、「狼と羊のたとへの事」と題せる諭言第一話の全文を、羅馬字より平仮名交り文に翻写して訳文例を示したのを最初とする。文例の前後には左の序跋を添へてある。

○此文は西曆一千五百九十三年、即ち今を去る

こと二百七十七年前の板本にて西洋字を以て日本字を書きたる本の権輿なりとて、英国の書庫中に見出したるを彼国の新聞紙に出せるなり。

○是昔より西洋にて我國の語を学ぶものの有りし一証にとて新聞に出せるなり、又按に此の如き文を以て翻訳の一体に与ふる、最佳ならん、尚其用字の可否は訳文率^{近刻}に論ずべし。

以上は往年渡辺修二郎氏が私に書送られた所であるが、右の文は柳川春三の説と認むと渡辺氏は推定された。西洋の新聞紙といふは、「ロンドン・タイムス」でもあるか。英国の書庫中とあるのは、ブリチッシュ・ミュージアムのことであらう。渡辺氏は先年尋いで私に向つて、「中外新聞」のよりも一年度古く、慶応四年^(明治元年)五月の「遠近新聞」(辻新次郎編)第二十七号に見えてゐることを報ぜられた。報道は共に明治四十五年のことである。^{注二〇}

この新村の記述については簡単に注解を施したことがあるので^{注二}、今は解説を省く。渡辺が『外交始末蹇蹇録』に携わつた明治三二年(一八九九)の前年に中田は外務省を辞しているの、兩人がこの出版をめぐつて接触していたかどうかはわからない。まして出会う機会があつたとしても、イソップ寓話に話題が及ぶとは思像できない。渡辺はただ新聞記事を新村に伝えたことでイソップと繋がるだけだし、それも一〇年以上後の明治四五年なのだから。筆者としては、中田の周辺に中田自身気づかなかつたであらうイソップとの縁があつたこと

を面白がりただけである。

注 一

中田の略歴は以下の文献に拠る。

『石川県史』(石川県 一九三二年三月)

『歴代顕官録』(原書房 一九六七年五月)

東亜同文会『続対支回顧録』(上)(下)(原書房

(上)一九六八年六月 (下)一九七三年八月)

石川文吉『石川百年史』(石川県公民館連合会 一

九七二年十一月)

秦郁彦『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』(東

京大学出版会 一九八一年十一月)

六角恒廣『漢語師家伝——中国語教育の先人たち』

(東方書店 一九九九年七月)

二

『漢語師家伝』は、西園寺公望外務大臣臨時代理が、山県有朋との雑談で、中田に揮毫の代筆をさせていると吐露するエピソードを伝えている。

三

西村賀子・志茂淳子『Les aventures de Télémaque の本邦初訳をめぐる書誌学的研究』(『和歌山県立大学保健看護学部紀要』第9巻 二〇一三年三月)が、それを示唆している。

四

中田敬義「日清戦争ノ前後」(外務省調査部第一課「史料特輯第一号」一九三八年一〇月)、『近代未完史料叢書 近代外交回顧録 (第一巻)』

(ゆまに書房 二〇〇〇年六月)所収。

五

山岸共「金沢出身外務官僚中田敬義」(『石川郷

- 六 土史学会々誌』第一八号 一九八五年)
吉田松陰『丁巳幽室文稿』山口県教育会編『吉田松陰全集』第三卷(岩波書店 一九三五年三月)所収。
- 七 新村出『伊曾保物語』の漢訳(『明星』 一九二六年一月)、『新村出全集』第七卷(筑摩書房 一九七三年六月)所収。
- 八 内田慶市『遐邇貫珍』にみえるイソップ物語(松浦章・内田慶市・沈国威編著『遐邇貫珍』の研究 関西大学出版部 二〇〇四年一月)注七文献に同じ。
- 九 注八文献に同じ。
- 一〇 中田敬義『明治初年に於ける支那語の研究に就て』(『支那語学報』 一九三六年)
- 一一 小堀桂一郎『森鷗外——日本はまだ普請中だ——』(ミネルヴァ書房 二〇一三年一月)
- 一二 森鷗外『還東日乗』(『衛生新誌』第二〇号 一九九〇年五月)、『森鷗外全集』第三十五卷(岩波書店 一九七五年一月)所収。
- 一三 川口久雄編著『幕末明治海外体験詩集』(大東文化大学東洋学研究所 一九八四年三月)
- 一四 竹盛天雄『石黒忠恵日記抄(三)』(『鷗外全集月報第三八卷』 岩波書店 一九七五年六月)
- 一五 注一四文献に、中田の漢詩が載っている。
- 一六 中田敬義『故陸奥伯ノ追憶』(外務省調査部第四課 一九三八年一〇月)、『近代未完史料叢書近
代外交回顧録(第一巻)』(ゆまに書房 二〇〇〇年六月)所収。
- 一七 中塚明『新たに見つかった陸奥宗光の手紙』(岩波書店『図書』四〇七号 一九八三年七月)
- 一八 外務省百年史編纂委員会『外務省の百年』上巻『第二編 第二章 陸奥外務大臣の登場と活躍』(原書房 一九六九年七月)
- 一九 新村出『伊曾保物語』の旧代和本(『天草本伊曾保物語』—新増附録 改造社 一九二八年一〇月)、『新村出全集』第七卷(筑摩書房 一九七三年六月)所収。
- 二〇 吉見孝夫『幕末、明治初期の新聞に掲載されたイソップ寓話——『万国新聞(紙)』『中外新聞』『遠近新聞』——』(『イソップ資料』第三号 二〇一三年三月)